

たちんぽ

～去勢娼婦の店～



日本一変態が多いと言われる埼玉県、某市。
この街の片隅に週末だけ営業している
変わった風俗店があるという。
その店にいるのは全て去勢手術を受けた風俗嬢……
すなわち男である。

そして自称変態である『俺』は
好奇心でその店に行ってみる事にした。

その店は普通の雑居ビル1階にあった。
外から通じる階段を降りてみると、「見るとペーの入り口とぞ
間違えとっな、いかがおつたの無い入り口だった。

俺が店の入り口まで降りていると、受付の店員に
声を掛けられた。

店員「いらっしゃいませ。お客様は本日最初の来店者です」

俺「あ、はい」

店員「それでは当店の簡単な説明をさせていただきます。
当店にいるのは全て去勢した男性です」

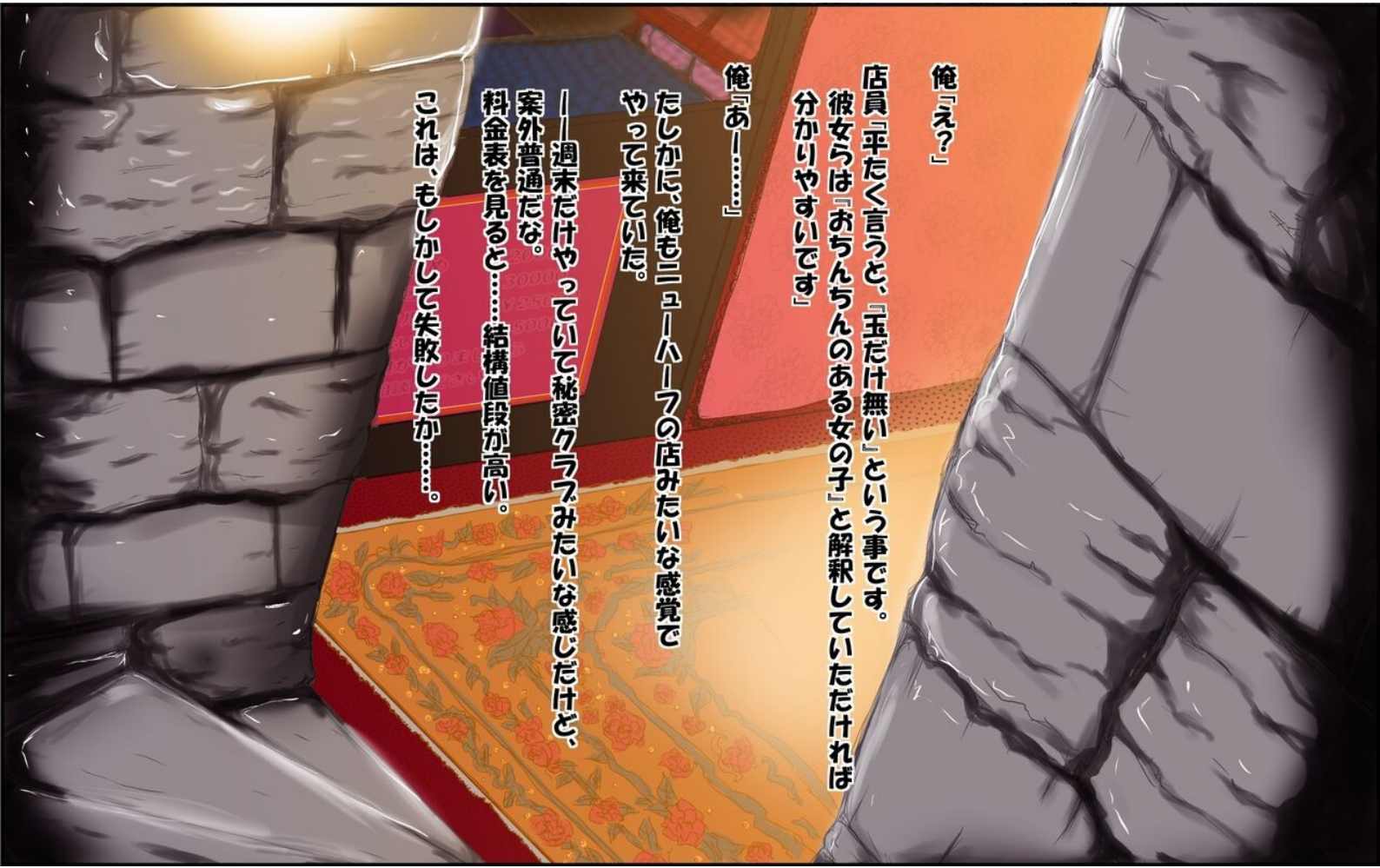
俺「うん、知っている」



店員「元は男性の体でしたが、心はほぼ女性ですので……、
『彼女』達には女性として接していただければ幸いです。
……かといって、完全な女性とも少し違います。
ユニセックスな、天使のような存在です。当店では
『去勢嬢』と呼んでいます」

俺「はあ……」

店員「それともう一つ、時折知らずに来店される
お客様がいらっしゃいますが、当店の風俗嬢達の
『去勢』の状態は、男性機能を無くしただけの
状態がほとんどです」



俺「え？」

店員「平たく言うと、『玉だけ無い』という事です。
彼女らは『おちゃんちのある女の子』と解釈していただければ
分かりやすいです」

俺「あー……」

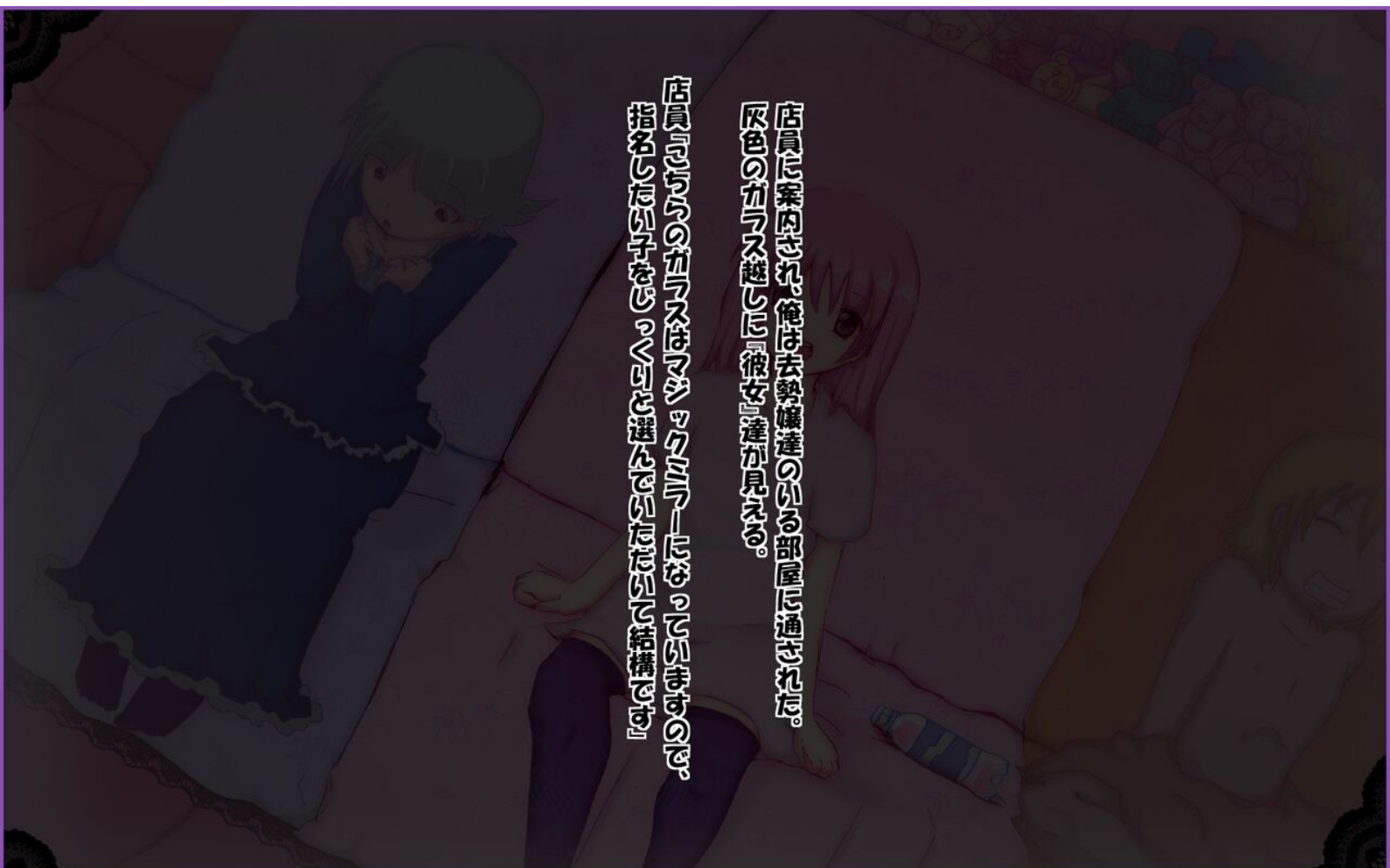
たしかに、俺もニューハーフの店みたいな感覚で
やって来ていた。

——週末だけやっていて秘密クラブみたいな感じだけど、
案外普通だな。
料金表を見ると……結構値段が高い。

これは、もしかして失敗したか……。

店員に案内され、俺は去勢嬢達がいる部屋に通された。
灰色のカラス越に『彼女』達を見える。

店員「おはようございます、マダム。どうぞお静かにしてください。
指名の嬢様を、この部屋と選んでいただく結構です」



まるで幼稚園か遊園地のような、子供じみたデザインの部屋に
彼女達はいた。
完全に女の子にしか見えない子もいれば、男とも女ともつかない
微妙な子もいる。
マジックミラー越しに見える彼女らの、
こちらの目を意識していない、お喋りの声が少しだけ聞こえる。
皆、他愛の無い会話をしているようだ。
俺はじっくりと観察する



ふと、一人の子に目が留まった。
ジュースを飲んでいたその子は俺に気付くように飲むのをやめ、
こちらを向いた。

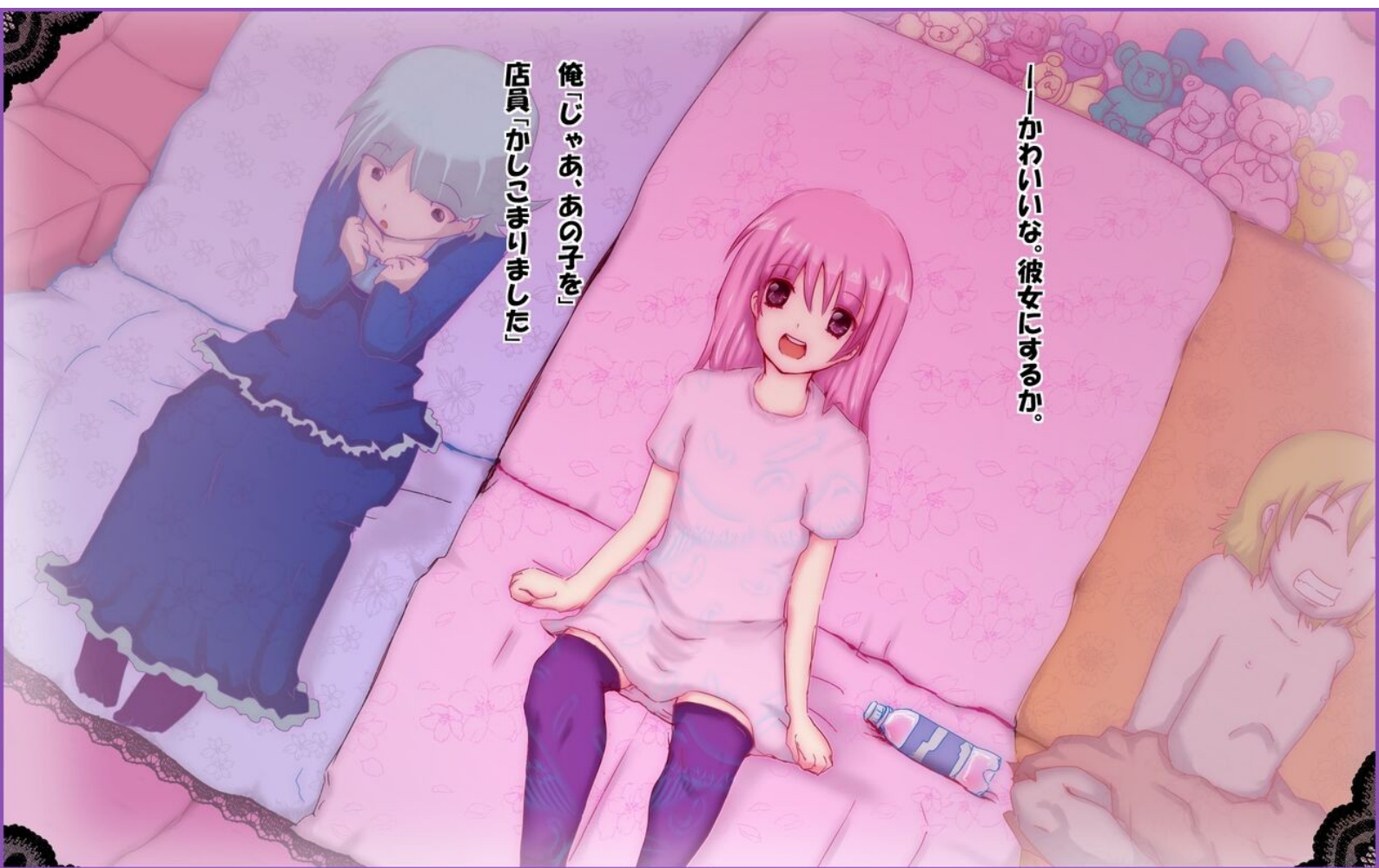
マジックミラーを透視してるかのように俺の目を
じっと見る。

ぞくぞくとする。



——かわいいな。彼女にするか。

俺「じゃあ、あの子を」
店員「かしこまりました」



店員が彼女を連れてくる。

女(?)の子「はじめまして。僕、ルイっていい嘛ーす。指名してくれてありがとうございます！とっても嬉しいよ！」

キャラ作りなのか素なのか分かんが、
ルイは子供みたいな喋り方だ。
本当に男なのかと疑いたくなるほど女の子っぽい
華奢(きゃしゃ)な体つきだ。

歳はいくつなんだろう？

……一応「女の子」なんだから
歳は聞かないのがマナーってもんだな。

俺「うん、はじめまして」
ルイ「じゃあ行っつー！」



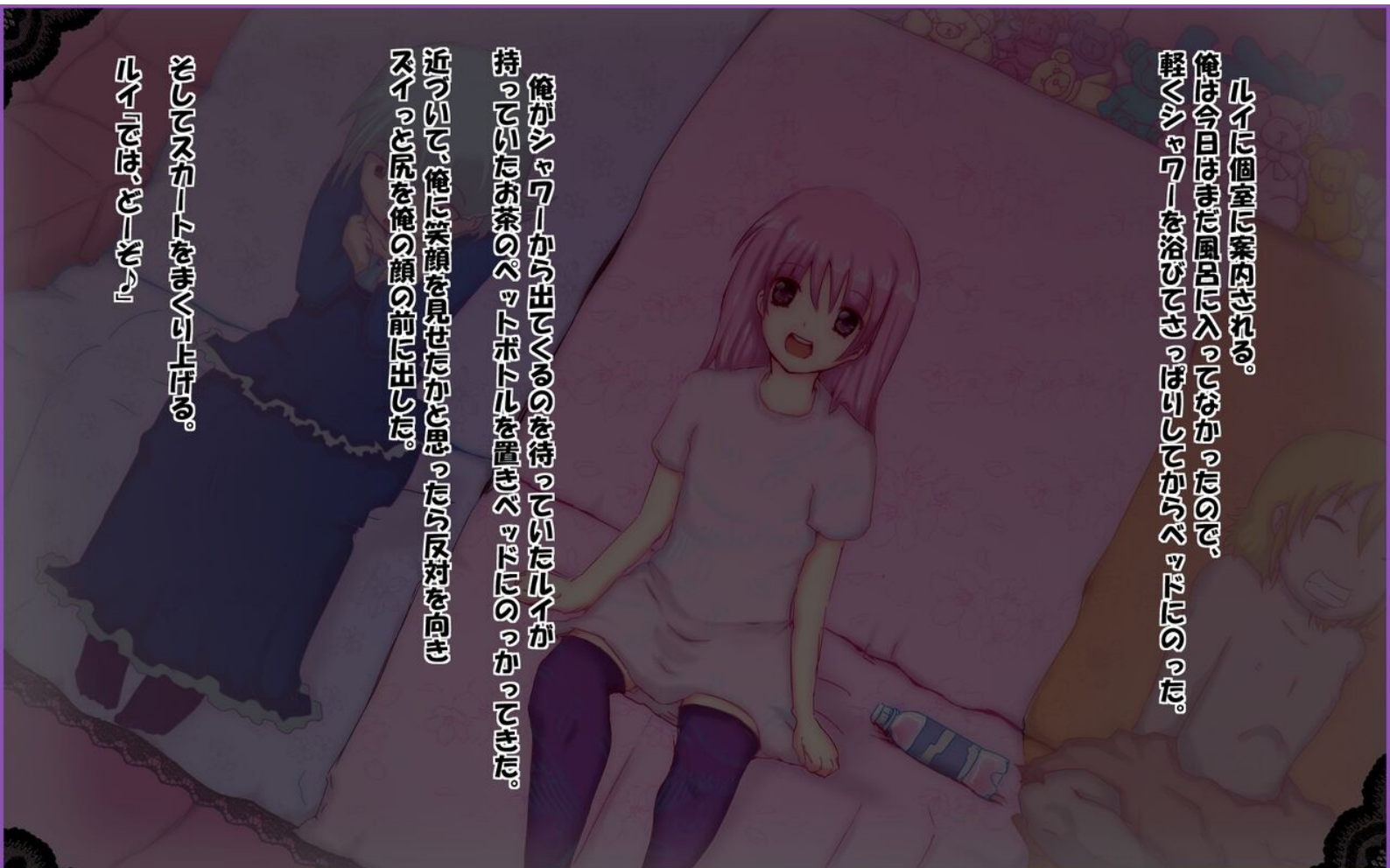
ルイに個室に案内される。

俺は今日はまだ風呂に入ってなかったんで、軽くシャワーを浴びてさっぼりにたのしませてもらう。

俺がシャワーから出てくるのを待っていたルイが持っていたお茶のペットボトルを置きベッドにのっかっていた。

近づいて、俺に笑顔を見せたかと思ったら反対を向きスイト尻を俺の顔の前に出した。

どうしてスカートをまへに上げる。
ルイ「おはーん」



ーアナルの所にぽっかりと穴が開いている。
穴から2センチほど下に目をやると、
本来はあるべき膨らみが無い。

玉無し……。

その下、小さなおちんちんがポロリとぶら下がっている。
俺「本当に男だ……」



しかし、そのおちんちんは普通の男の物と比べると小さい。
女性ホルモンを使っている人のようだ。

ルイ「どうしたの？ お店の人に説明してもらったでしょ？」

ルイが無邪気に俺を見て話しかける。

小さなおちんちんが喋るのに合わせてフルフルしている。

俺「あ、ああ……」



とりあえず、俺はルイの尻を堪能する事にした。

ニ
チ
ユ

チ
ロ
ウ
ン

誰も得をしない情報だが、僕はケツ穴いじりが好きです。

ピ
ッ



ルイ「ん……」

ルイがピクリと反応する。
部屋の備え付けのローションを手付けて
ルイのアナルにスルスツと指を出し入れしてほぐす。

ニ
チ
ユ

チロリン

ルイ「ううん……」

気持ち良さそうにしているルイ。

ピ
ッ



アナルがだいふぼぐれてきた。
使い慣れているであろうこの穴はすぐに柔らかくなった。
時折俺の指を啜えるようにキュッと締まる。

ルイは感じているようで、彼女のおちんちんが
ピクピクしている。

アナルを広げると、何か良い香りがする。
客に不快な思いをさせないように
事前に腸内を洗浄して上に何か香水のような物を
仕込んでいるようだ。

変態である俺としてはこのままスカトロになっても
全然かまわないのだが……。



ルイ「ん……、ねえ……」

俺「ん？」

ルイ「指をさ……、根元まで入れて……、
おちんちんの方を……探ってみてよ……」

言われた通り、指を根元まで入れて探ってみると、
コリコリした感触がある。

俺「これは……、前立腺だな？」

ルイ「うん、そうだよ。やっぱりここが一番気持ちいい……。
ごめんね、僕が気持ちよくさせなくちゃいけないのに」

——いえ、これでも結構です。

股間以外は女の子に見える彼女の
反応を一瞬かわいいと思ってしまった。



彼女の反応を見て気分を高めている俺は、ちょっと得意地悪心が出てきたので彼女の前立腺を更に「リ」リする。

ルイ「あっ、そんなにっ……!!」

ルイは前立腺を強く刺激されて尻をモジモジさせる。次第に前立腺が固くなり同時に彼女のおちんちんが勃起してわずかに膨らむ。チゅッ

ルイ「……あ、だめ、このままじゃ、イっちゃう……」

俺「お？」

それを聞いて俺は「リ」リをやめた。

ルイ「何でやめちゃうのっ」

おあずけをされたルイが切なそうに尋ねる。



そりゃあ、お客さんは俺だからな。
俺のニムセインチのデカチンも
どよぞろお持ちちよくなりたのわ……。

そうして俺は勃起した自分のチンポをルイに見せる。

俺「じいつを見てさっと思っっ」

ルイ「すごく……大きいです……」

でかいのほいからせ、このまじや
治まらなかつたおえんだ。



ほぐしきったルイのアナルに俺のチンポが入る。

ルイ「あん」

念入りにほぐしたのでチンポがスムーズに入ってゆく。
アナルの入り口のヒタと俺のチンポがフリフリと擦れる。
それに応えるようにルイのおちんちんがヒクつく。

ズッ

ゴ

ルイ「ああ……」

そして俺は腰を振る。



スチュ、スチュ。

チンポを出し入れすると良い香りがほのかに漂ってくる。
俺はわざとルイの前立腺を刺激しないように、
少し上に向かってチンポを突き出す。

ズチンッ

ズチン

前立腺を押すか押さないかの
ギリギリの刺激を受けてルイの息が更に荒くなる。





ルイ「もっちょっと……おちんちんを下に向けてよ……」

ズチン

ズチン

俺「なんで？」

ルイ「意地悪しないでよ……」

チン

ルイが尻を上下にモソモソさせて自力で
俺のチンポに前立腺を絡めようとしてくる。

俺「仕方ないなあ」

俺もそろそろ、ひとイキして2回戦目を
やりたいのでルイのお願いに応じてやる事にした。



ルイのアナルが俺のチンポに容赦なく突かれる。

ルイ「あ！ あん！ あ！」

ズクムン

しばらくした後、ルイがビクンとする。

ルイ「ひゅー」

俺の脚に何か液体がかかった。

ズクムン

手に取ってみると、

ルイのおちんちんから透明の液体が
流れ出ている。

ドク

どういやネットか何かで見た気がする。

精液は金玉だけから全て出てくる

のではなく、複数の器官から
出てきた液体が混ざって射精されるとー！。

ヒュー



玉無しのルイから出てきたのは精子の無い精液が……。

生殖に使う事もなく、ただ彼女の快感を傍から確認できるだけの存在の、いやらしい粘液。

——仮に、他の同じような去勢嬢の子も交えて乱交をしても、このいやらしい液体を垂れ流し続けるだけ……。

追加料金を払えば複数の子も呼べるのかな？
もしできるならば、やってみたいな。

……俺は自分の精液を舐めてみた事がある。
こういう、玉無しの体を持つ子の精液は普通の精液と比べて味に違いはあるのかな？

さっき、俺の目の前に突き出されたルイのおちんちんは普通の男のモノよりひとまわり小さかった。

大きさを例えるならば、雌牛の乳首ほどの大きさ。俺は／＼とだからガ千の男のチンポはゴメンだが、ルイみたいな子の『おちんちん』ならば全然OKだ。

ヒューン

ドブッ

もし機会があるならば、数人の子を「列に並べて射精させて
味を比べてみるのも悪くない……」。

……さっきからやけに締まりがいいな。ルイの顔を見ると
真っ赤になって耐えている。俺がちょっと力を入れて突くと
アナルがキュッと締まって気持ち良い。

さて、ルイのおちんちんはどうなってるかな？ 俺は腰の
動きを少し緩めてルイのおちんちんをまさぐった。

ルイ「ひっ……」

ヌルヌルになったルイの包皮の先から亀頭が少しだけ
出ている感触がある。俺は皮の中に人差し指を入れて
包皮と亀頭の間のヌルヌル空間をなぞって一周してみる。

ルイ「あぎっ……」

ルイのアナルが強くヒクヒクします。

このヒクヒクは俺にも気持ち良かった。俺は自分の
気持ちよさの為、指を何周もさせる。今度は腰も動かさず、
ひたすらルイの亀頭を刺激して、腸内の絡みつく粘膜を
楽しんでみる。指の刺激に負けておちんちんから粘液を
漏らし続けるルイ。

ルイ「い……い……」

ヒッ
フッ

グッ
プッ

俺が色々試していると、
ルイが何か言っているのに気付いた。

ズチュン

ズチュン

ドチチュン

ヒュン

ルイ「……ん」



ルイ「……って」

俺「え？」

ルイ「早く終わって……」

俺「は？」

ズン

ズン

ポタ
ポタ

ルイ「僕……、完全な女の子じゃ……、
ないから……、すぐに何度もイケない……っ」



なるほど。

確かに、男は1回イったら即座に
2発目に行くのは辛いもんな。

こっぴど所は同じが。

それを理解した俺は、

……逆にもっと長引かせてやろうと思った。

ズシユ

俺は腰を振ったり、一度イって敏感になった
ルイの亀頭を触ったりと、緩く長く楽しんだ。

ルイ「ぎっ……はひっ……ふ……」

ポッ
ポッ

俺がイキそうになるといふ腰の動きを抑えて
寸止めで鎮める。

ゆっくりと動いている時は丹念にルイの前立腺を蹴る。

腰が疲れたらルイの亀頭クリクリでアナルに奉仕させる。
回復したらまた腰を振って俺の亀頭が前立腺を突く。

俺がイキそうになると(以下略)……そんな事を10分くらい
続けているとルイが泣きだす。

ルイ「うっ……ひゅっ」

涙目で辛そうにしている。

おちんちんからは透明の液体が滴っている。

前立腺を蹴る度、ルイのアナルが
キュッと締まって俺のチンポを拒むように抵抗する。

ルイ「し、死んじゃう……」

……じゃあそろそろ終了とイキますか！

ポッ
ポッ

散々ルイの前立腺を蹴ってから俺もイク。

ルイ「はあ……、はあ……」

腰をガクガクさせながら快感と
苦痛の入り混じった刺激から開放されたルイ。

ルイ「……いじわる……」

ド
ッ
ッ



俺がチンポを抜くとルイの緩んだアナルが
ぽっかいと開いたまま俺の精液を垂らしている。

ルイ「……ど、どう？ 気持ちよかった……？」

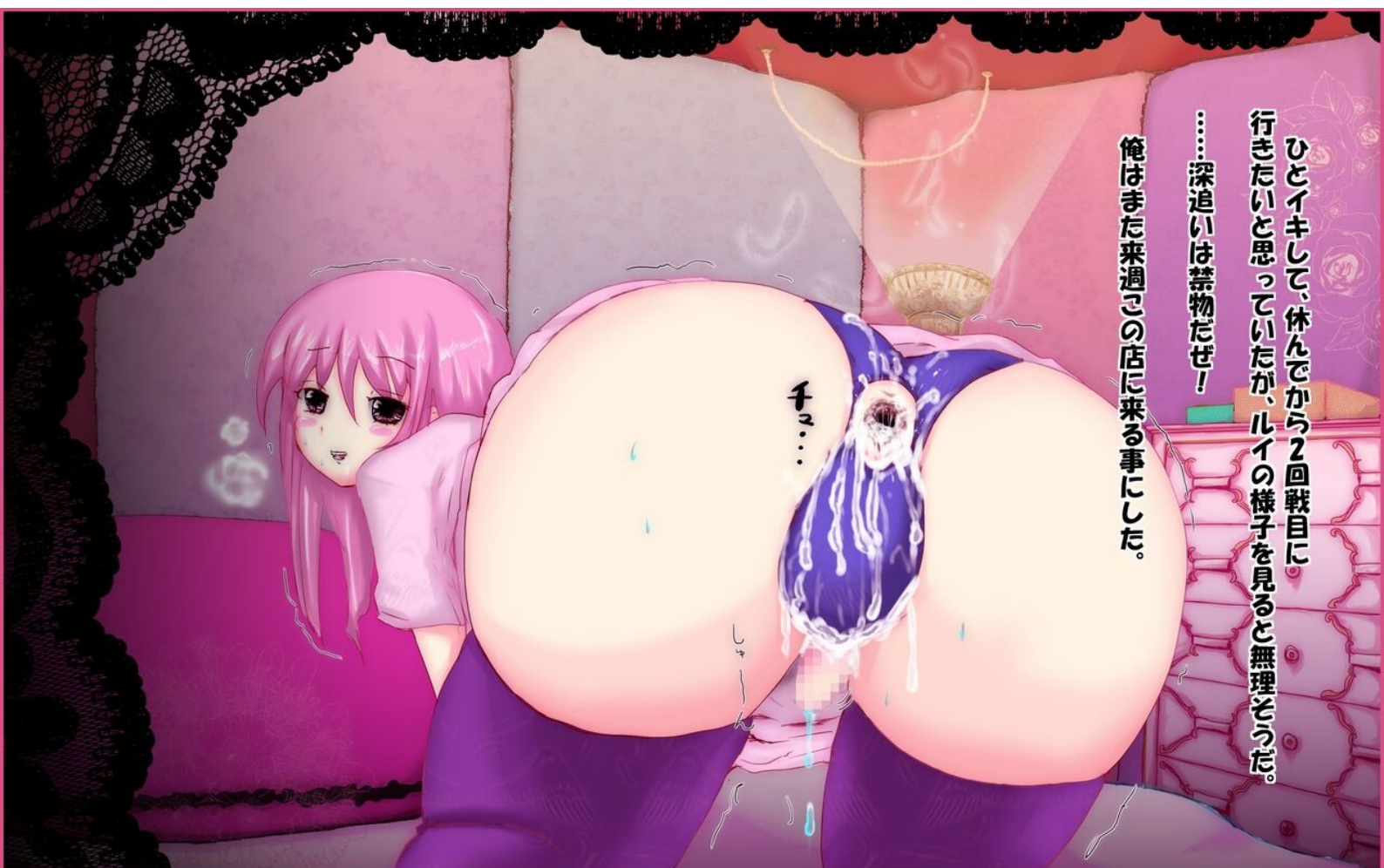
ガクガクしながら営業スマイルをするルイ。



ひとイキして、休んでから2回戦目に行きたいと思っていたが、ルイの様子を見ると無理そうだ。

……深追いは禁物だぜ！

俺はまだ来週この店に来る事にした。



余った時間、俺はルイと雑談をした。

彼女がなぜ去勢嬢になったのか。月にどれくらい客を取るのか。

週末だけやっているこの店が採算がとれているのか。
歳を取った彼女達が、その後どうするのか。

好奇心を満たすだけの内容の会話。

こうして話して仕事だけ見ていると、
本当にただの女の子だと感じる。

彼女の声は女性そのものだった。

去勢をしたのは声変わりが始まる前なんだろう？
女性ホルモンを打ったりしているんだろう？
接客業である彼女の会話は楽しい。客に気まずさを
感じさせないような会話が上手い。

頭を撫でると子猫のようにジっとし、手を握れば握り返す。

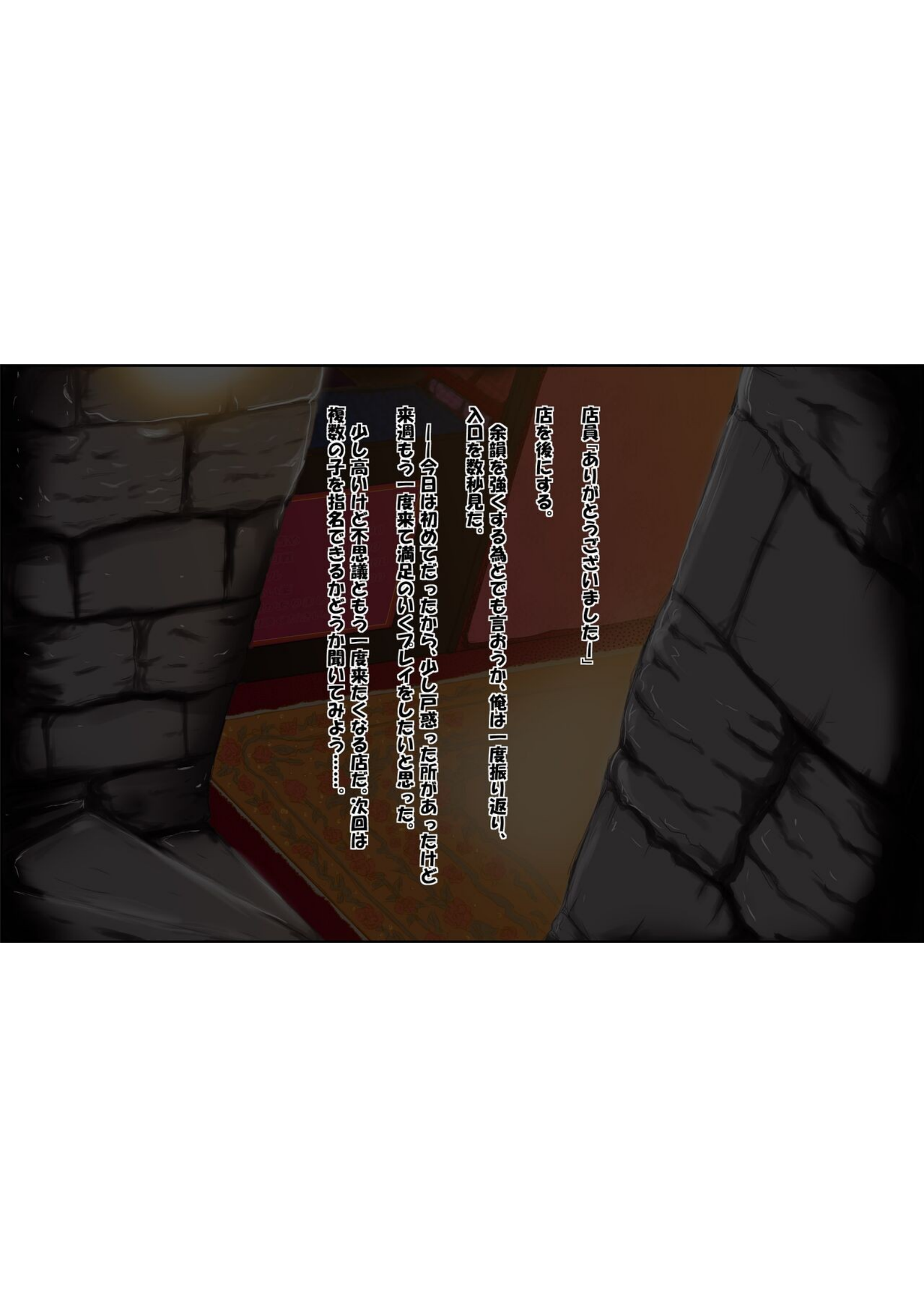
不覚にもかわいいと思ってしまふ変態の俺。

見た目が少女っぽい事もあって、賢者モードになった俺は、
時間いっぱいまでルイを愛でた。

この子は俺をどう思っているんだろう……？
普通に客として、仕事として会話をしているんだろうか——？
聞いてみたい事は色々あったが、そろそろ時間だ。

最後に二つ、彼女とキスをしてみたくなった。彼女は普通に
してくれた。何の変わりも無い普通のキス。男とキスをする。

俺は変態なんだな、と思った。



店員「ありがたうございましたー」

店を後にする。

余韻を強くする為とでも言おうか、俺は二度振り返り、
入口を数秒見た。

——今日は初めてだったから、少し戸惑った所があったけど
来週もう一度来て満足のいくくらいをしたいと思います。

少し高いけど不思議ともう一度来なくなる店だ。次回は
複数の子を指名できるかどうか聞いてみよう……。

一
週
間
後

前回のリベンジをすべく、俺はスマートに来店した。
そしてマシクマラーの部屋に行く。前と同じように
ソファにはルイが座っていた。

俺『あの、』

店員『はい、何ででしょうか？』

俺『複数の子とのフレイは可能ですか？』

店員『それは可能ですが……、残念ながら今日はサービスデー
になっておりまして、普段よりも来店されるお客様が
多いので、申し訳ございませんが今日は一人だけの指名
と言う事でおねがいします……』

乱交フレイができないのは残念だが、
唯一の顔見知りのルイが空いていたのが不幸中の幸い
と言っべきか……。俺は再び彼女が相手になった。

ルイ「はじめまし……で、じゃないね！ また指名して
くれたんだ？ 嬉しいな！ ありがとう！」

無邪気に笑うルイ。

俺「うん。今日も頼むよ」



前回同様、部屋に入る。

ルイ「おえっ、今日はちょっと変わった事になりっ」

俺「変わった事？」

ルイ「うん。普通のお客さんにはお尻やおロのサードス
ぽっかりなんだけど、気に行ったお客さんには
もっとサードスしたいんだ！」

俺「どんな？」

ルイ「それは今から見せてあげるよー」

突然、ルイが俺の体をスキャンし押し倒した。

俺「うおっどー」

そして俺の腰の「ポイント」に座りは飛び乗る。
身を乗り出して俺に軽ハキスをしながら叫んだ。
立ちあがって俺の顔の「ポイント」を見る。

前に見た穴あきパンティ……。
おうちんがズラズラしてんぞ。

何だろう？

いきなり放尿でもするのか？ 変態かつ想像力が豊かでない俺はしょうもない事を考えた。

ルイ「くっくっ」

そう言ったルイが腰元をまさぐる。

この穴開きパンツは左右が結んである紐パンだったらしく、前の方から外れてムラリと垂れ下がる。





俺「あらっ」

パンツが脱げ、俺の目の前にはぽっかりと穴があった。
彼女のおうんちとアナルの間に穴がある。

俺「んん？」

ルイ「どう？ こっちの穴もやってみない？」

これは……、フタナリってやつですか？
本物は初めて見た。

でんちゅ



ルイ「……今、フナタリだと思ったでしょ？」

俺「……え？ 違うの？」

ルイ「残念、これは去勢する時に性転換手術の要領で作った
人工の穴です」

俺「あ、そういう事ね……」

ルイ「このお店でこういう体してるのは僕だけなんだ。
とっても珍しいよ？ ちなみにこの穴は膀胱に
繋がってまーす」

俺「へえ、変わってる……」

ぺろんちょ

本当は特別料金が必要なのじゃないが、
ルイは俺を気にいっているからぐん
格安でやらせてくれるぞうな。

……結局お金は取るのね……。

ぽんちゃん





ルイ『はいとーぞー』

見れば見るほど変な穴だ。

性転換手術の要領で作ったから、
女の子の物とそれほど変わらない感触なんだろうか？

この構造だとオシッコをする時は
やはり座ってするんだろうな。

にしても、膀胱に繋がってるって事は
元は男の尿道だった。

つまりチンポが入るほどの太さは無いはず。
だからそれが入るように
穴の大きさも手術で広げているのかな……。

この珍しい穴に見入ってしまった。



ルイ「あの……」

俺「ん？」

ルイ「その……、せっかくだから早く入れて欲しいかも……、
……お尻から刺激されるよりも……、
こっちの穴から直接前立腺を
押してもらえると……凄く気持ちいいんだ……」

じゅ……

これから始まる快感を想像をしてか、
ルイのおちんちんが膨らみ始める。

何かもう俺が接客してるみたいだな……。
すると、ルイの……。何て呼んで良いか
分からない穴から粘液が出てきた。

俺「あれ？ 濡れるんだ？」

ルイ「これはね、男の人で言う『ガマン汁』だよ。
ちやうどこのオマンコの入りの所に
カウパー線があるんだよ」

そう解説された俺はルイのオマンコ(?)の
入り口に顔を近づけて観察する。

肛門側に小さな穴がある。
そこから、じんわりとカウパー汁が
滲(にじ)み出ている。



仕事とはいえ、自分の一番恥ずかしい所を
まじまじと観察されているルイが
顔を赤らめてせかす。

ルイ『はやく……』

俺『お、おう』

じゅ……





俺じゃあ、入れるよ
ルイ

フフ
フフ

未知のオマンコに俺のチンポをあてる。

ルイ「……」

中がどんな風になっているか分からないので俺はゆっくりとチンポを挿れた。

ルイ「あ……」

中にある程度入ると、亀頭の先にコツンと固い感触があった。

ズ……

俺「前立腺か？」

ルイ「うん……、そのまま、もっと入っても大丈夫だよ……」



言われるまま、腰を更に進める。

前立腺は弾力があり、少し腰に力が入った。

ルイ「う……ん……」

ズズズ

突然、スンと亀頭が中に吸い込まれた。

ルイ「ひゃん！」

前立腺が決壊するように一気に開き
一瞬でカリ首まで入った。

この変わったオマンコはー、
入り口から途中まではフニフニと柔らかく、
途中、弾力性のある前立腺の塊があり、その先は
はっきりとした膀胱のスカスカの空間があった……。



エロ漫画等で、子宮口を貫いて
チンポが子宮に入っているシーンがあったりするが、
あのフィクションの感触を
リアルに再現しているような構造のオマングだ。

仕組みが分かった所で、この穴を堪能する為、
俺は腰を動かす。



入り口と最深部はいいとして、
コリコリした前立腺がどのくらい刺激に
耐えられるかはよく分からないので
最初は慎重に腰を動かした。

チンポを膀胱から出し入れする度に
前立腺の固いゴム輪みたいな感触が
俺のカリ首を締め上げる。

それと同時にルイは前立腺を最大限に
刺激しているので声を上げる。

ルイ『あ！ あ！ あう！』

ズ
チ
ッ
プ
ビ
ッ

ヌ
チ
ッ



前立腺の中にチンポを出し入れされる感触って
どんな感じなんだろう……？

そんな事を考えつつ、次第に俺の腰の動きが早くなる。

ルイ「あ！ ああ！」

ルイはもう刺激にただ身をゆだねるしか
出来ない状態だ。

この声も自分の意思とは関係無しに
出てしまっているようだ。ヌィ

するとルイの
おちんちんの先から
粘液が出てきた。

おちんちんの尿道がオマシコ上部と繋がっているようで、
俺のチンポに掻き出されたローションや
カウパー液がピストン運動に合わせてうに湧いてくる。
ズ
チ
ッ
ポ
ッ

そして膀胱の筋肉が緩んできて
ルイのオシッコも漏れ出す
透明と黄色の混ざった液体が出てくる。



俺「大丈夫か？」

苦しそくにあえぎ声を上げてゐるルイに声をかける。

ルイ「うん、だい……じょうぶ……、
ねえ、さっさと……エネマグラがあるから……、
入れてもらっていいか……な」

——部屋にある備品の入っている引き出しにはエネマグラがあった。

俺「えーっと、これは誰が使うの……？」

ルイ「僕だよ……」

俺「そっか……」

俺がルイのアナルにエネマグラを入れる。

Enemagra



最初はルイが気持ちよくなるだけだと思っていたエネマグラだったが、これを入れた事によって俺のカリ首への締め付けも増した。

——柔らかな粘膜でコーティングされたゴム輪で俺の亀頭を絞るような感触が気持ち良い。

かたやルイは前立腺をエネマグラと俺のチンポに揉みしだかれて悶えている。

ルイ「ああ！ うあ！ いぎぎぎぎぎ！」

……こんなになって大丈夫なんだろうか？



エネマクラを入れてから、
ものの10秒ほどでルイはイってしまった。



次の瞬間、オマンコの中と
入り口から粘液が噴出す。

前立腺からの精子のない精液と
カウパー線からのカウパー液。

ルイのオマンコの中はすぐに粘液で
いっぱいになった。

俺がチンポを出し入れする度に
粘液が溢れだして
ベッドがビショビショになってきた。

ルイの前立腺が2回、3回と収縮と
弛緩を繰り返し粘液を出し続ける。

イっている最中にも俺のチンポが
前立腺の中を出入りし、エネマグラと
挟み撃ちにされ締め上げられているルイ。

ルイはイキながらイってるようだった。



俺もイった。

ルイのおちんちんから俺の精液と
ルイの粘液と尿が混ざり合った
液体が花火のように噴出した。

ほんじゃーい。



この不思議な感触のオマンコは
貴重な体験だった。

本物のオマンコはおるか。
恐らくオナホールでも
再現不可能であろうルイのオマンコ。

チンポを抜く。
緩みきった膀胱から
オシッコが流れ出る。

ぬほ。

ジューッ

何分かした後、ルイが目を覚ます……。



——意識がもどったルイ。

しかしだいたい体力を消耗しているようで、
股間も拭かずにごろんと向きを変えて
そのまま休んでいる。

ルイ「……ふう。よかった？」

俺「うん」

ルイ「腰が抜けちゃって動けないや……。
悪いけど、エネマグラ抜いてもらっていい？」

俺「おう」



ルイ「あうー」

抜いた途端に、精液とカウパー液と
オシッコと腸液が文字通りルイの
下半身の穴という穴全部から出てきた。

ブビッ

俺「うおー」

ヌポッ



ルイ「うう、エネマグラが前立腺擦ってたよあ……」
俺「ああ、ごめん」

腰が抜け、体を震わせながら、
だらだらと色々な液を漏らしながら休むルイ……。



ルイが立ち上がって冷蔵庫を開け
ペットボトルを手にとった。
でっきり俺にくれるのかと思ったら
自分で飲み出した。

俺』……そういや、店に入ってきた時から
ずっと何か飲んでるね』



ルイ「そりゃそうだよ。
とんとんオシッコしないと
膀胱炎になっちゃうもん」

俺「なるほど……、
膀胱にチンポ出し入れたもんな。
……結構大変なんだな」

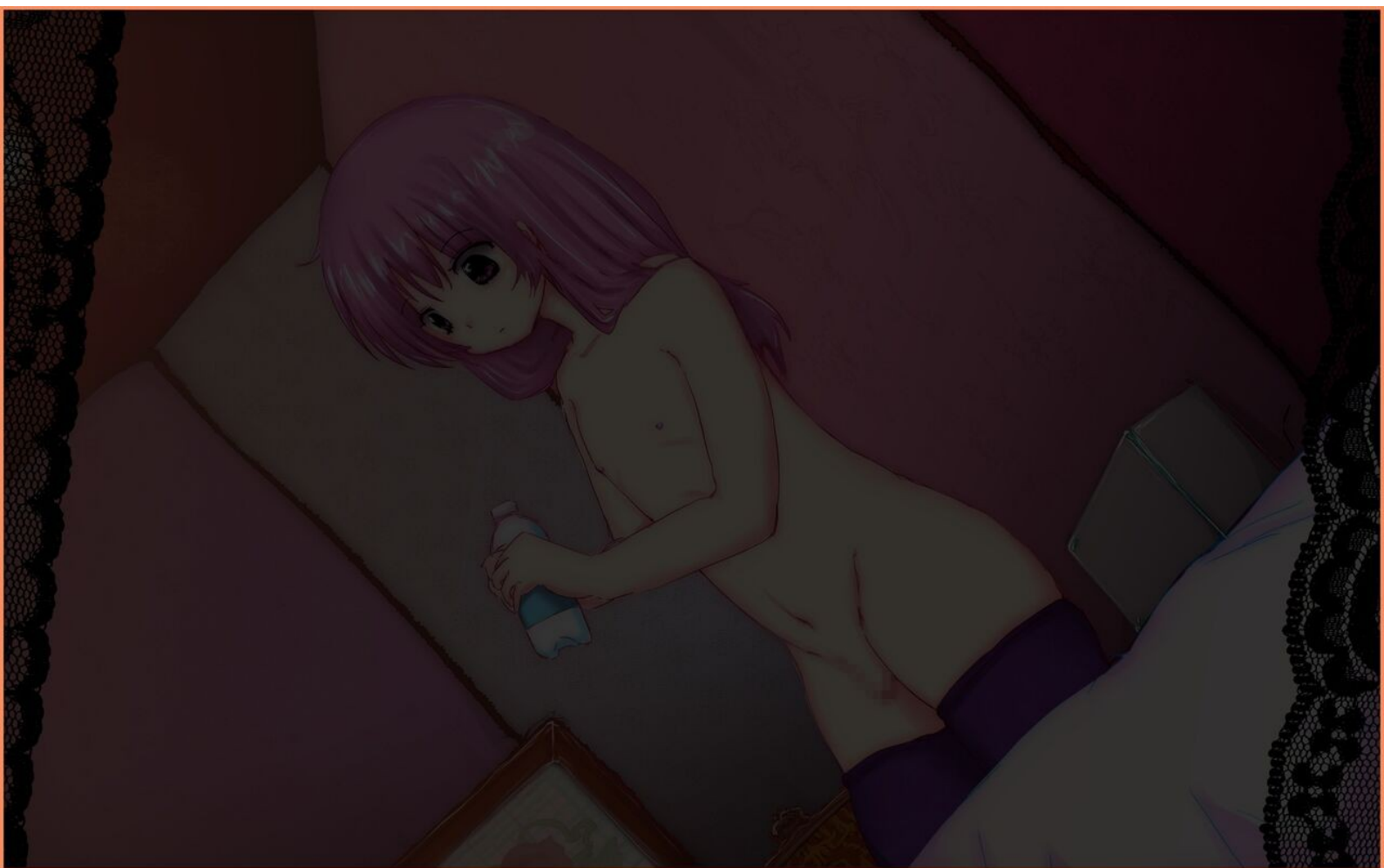
ルイ「まあね」

グイっとお茶を飲む。

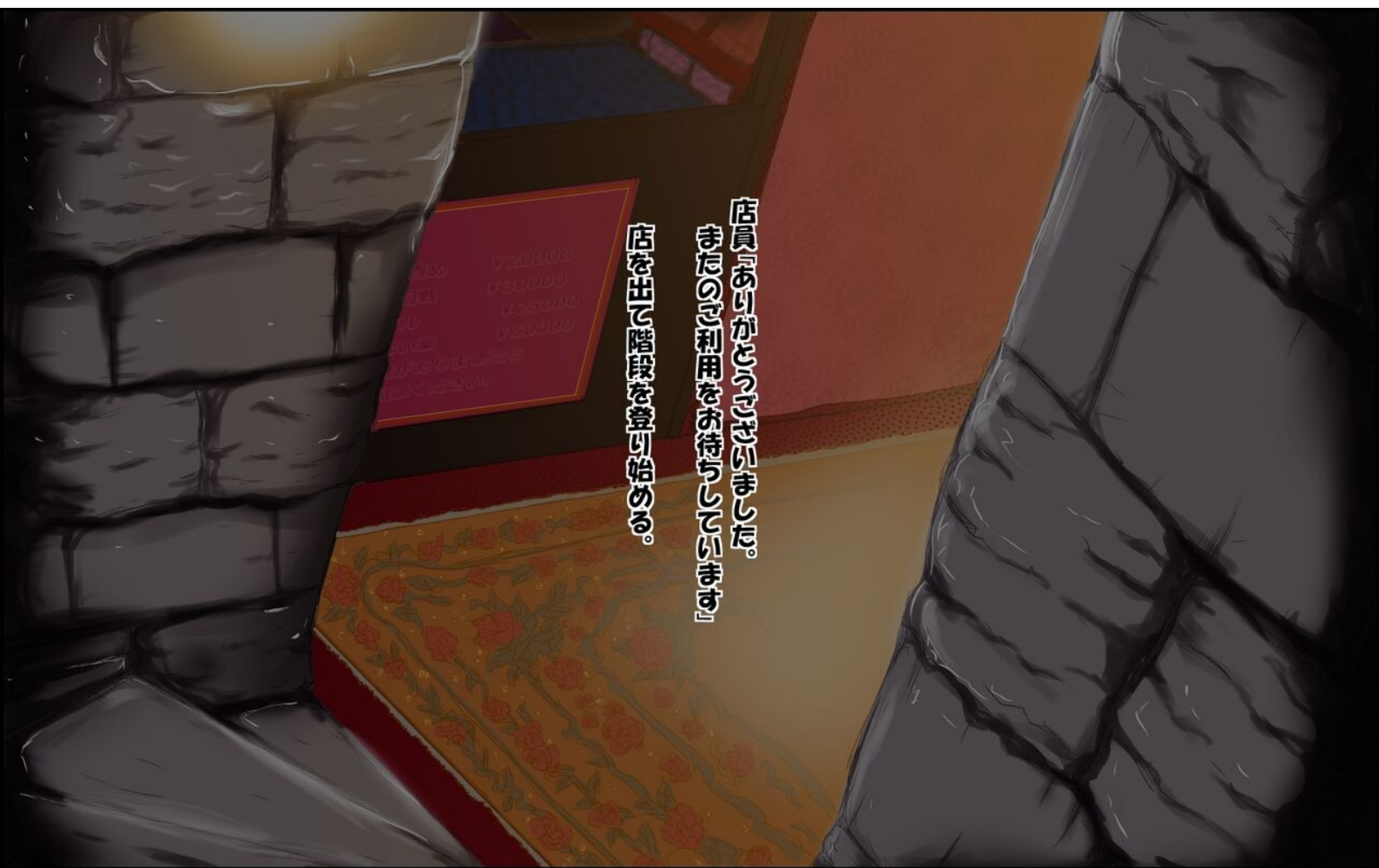












店員「ありがとうございます。
まだのご利用をお待ちしています」
店を出て階段を登り始める。

今日は珍しい体験ができたな。

ルイのオマケコはもとより、
あの子自体が無邪気でかわいい……。
……男だけ。

次でさほ、複数の子指名して
色々やってみ……。……。

まあさ、ルイも指さして……。……。

……。







¥20000
¥30000
¥25000
¥50000
おまけ
おまけ
おまけ

またね

おいしい